

石巻復興 NEWS

石巻専修大学 経営学部 丸岡ゼミ 平成 23 年 9 月 30 日発行 第 3 号

仙石線復興へ向けて

東日本大震災直後、ニュースで、野蒜駅付近を走行していた仙石線の列車と連絡が取れていないと知ったとき、私たちは、背筋が凍る思いがしました。

毎日多くの人々の通勤の足になっている仙石線が脱線するなんて考えたこともありませんでした。脱線した列車は、翌日に県警へりに発見されて、乗客全員が救出され安心しました。

しかし、この大震災が残した爪痕はこれだけではありませんでした。仙石線の線路は大きく損壊してしまい、仙石線の運行が厳しい状態になってしまいました。

震災から3ヶ月近く経って、ようやく高城町駅までの運行は再開したものの、残念ながら、石巻駅までは運行していません。

仙石線の代わりに住民の新たな移動手段として高速バスが活躍しています、震災後、徐々に本数が増えていき、今では仙台と石巻を繋ぐ貴重な移動手段となっています。



高速バス（石巻専修大学前）



私たちは、現状をより詳しく知るため、石巻駅でJRの職員にインタビューを実施しました。

—現在の復旧状況はどうですか？

「石巻駅から矢本駅までは復旧していますが、それから先は復旧の見通しがたっていません。」

—復旧の妨げになっている物がありますか？

「路線のダメージが大きくて、地面の状態が酷いです」

—どれくらいで復旧できそうですか？

「見通しは立っていませんが、数年はかかると思います。」

石巻駅から矢本駅までは復旧しているとの事でしたので、高城町駅から矢本駅の間が不通となっているようです。

復旧の見通しが立っていない区間のうち、最も被害が大きい東名駅から野蒜駅の間では、沿線住民の多くが津波対策で高台への移住を希望しているため、東松島市は、新たに建設する市街地を通るよう路線変更し、新駅建設をJR側に求めることも検討しています。

しかし、路線変更には巨額の費用と長い時間がかかってしまうようです。仙石線に早く復旧してもらうことを皆さん望んでいると思いますが、自然災害ばかりはどうにもならないので、時間がかかっても、自然災害に負けない鉄道路線へと復興してもらいたいです。

（稲垣雅也、金津甲樹、菊池駿、吉城翔太郎）

◎ボランティアの声

「経済復興のお手伝いのために、旅館に泊まり、おいしいものを食べて、おみやげを買います。」

（東京都・50代男性）

桂島を襲った東日本大震災

私（内海）の父方の祖父母は、桂島という塩竈の港から6km程離れたところにある離島に住んでいました。3月11日の東日本大震災の津波により家が全壊するという大きな被害を受け、やむをえず私の家に避難しました。その後、震災も少し落ち着いてきた4月4日に、祖父母の私物を運び出すために私と祖父母の3人で桂島に渡るようになりました。

桂島に上陸すると予想以上の光景が私を待っていました。よく歩いていた道路には、家の残骸が山のように積み道を塞いでいました。小さい頃から泳いでいた砂浜は、貨物コンテナが打ち上げられ、引き波で瓦礫が散乱しているなど、とても人が泳げるような場所ではありませんでした。そして祖父母の家は、津波で流され元の場所とは全く違う場所に建っていました。辛うじて原型は留めていたものの、家の中はひどい有様で、そもそも家の土台が無くなってしまっているの、住むことは出来なくなっていました。

その後、帰りの船の出港時間まで島の避難所となっている、今は廃校となった小学校の跡地へと行きましたが、轟音とともに校庭へ自衛隊のヘリコプターが着陸してくるなど、普段ではありえない光景がここでも広がっていました。

ただ、そこで避難している人たちが元気だったのは意外でした。小さな島なので普段から住民同士のつながりが強いからか、被害を受けた人たちが集まっている避難所でも笑い声が響いていました。この人達が元気ならまた桂島は復興できる、私はそう思いました。

（内海善樹、末永寛二、久道溪、横山風太）



道路上に建つ祖父母宅（桂島）

仙台市での震災体験

3月11日、私（末永）と兄、そして兄の友人は仙台市宮城野区の自宅にいました。地震が起こったことにより、本棚や食器棚が大きく揺れ倒れたため、すぐに家から出ました。揺れが激しくなり、立てなくなってしまい、自宅の隣にある公園の柵に道路側からつかまっていた。すると、道路を挟んだ向かいの家のブロック塀が私たちの方向に向かって倒れてきました。反対のブロック塀に背を預けていたら、と思うとぞっとします。

揺れが収まってから携帯電話で家族に連絡を取ろうとしましたが、電波が通じず連絡が出来なかったため、とても不安になりました。そして、なにか情報がないかと思い、避難所になっている中学校に向かいしました。その途中、水が道路に流れてきました。それと同時に近くにいた男性が大声で「津波が来るから反対側に避難しろ!」と叫びました。私たちはそれに従い、来た道に戻り、津波が届かない高台の方へ走って行きました。

冷静になると、その後の事を考え、食糧や飲料を購入できる店を探しました。営業していた店の中は思った以上に品が豊富にあり、私は家族6人分の食糧などを購入しました。

約一時間後、携帯電話で家族の安否を確認できたので、一時自宅に戻り、家の中を見渡すとガラスや食器の破片が散乱し、パソコンやテレビなどの家電が無残にも倒れていました。この状態を見た兄の友人は家族の安否や自宅の状態を確認する為、ここで別れました。そして、私たちはまだ明るい時間の間に食器の破片やガラスの破片などの片づけをし、今後生活するにあたって必要なものを集めました。

日が暮れ、作業をする事が厳しくなったため、貴重品や必需品を持ち、避難所になっている病院に向かいしました。数時間ほど病院で待機していると、父から家族全員が無事帰宅したという連絡が入った為、私と兄は家に戻り、家族と合流することができました。そこから、ろうそくを使った生活が始まりました。不便であったが家族が無事で良かったと思いました。

この体験を通し、私は日常的にテレビで報道されている事件や事故は決して対岸の火事ではないと改めて思い知らされました。後日新聞を見て、被害の規模を知り、私はこの大震災の事を絶対に忘れまいと思いました。

（末永寛二、久道溪、内海善樹、横山風太）

◇ボランティアの声

〔活動場所は〕

「Facebook で見付けた」

（ノルウェー・20代男性）

皆様からのご意見・ご感想をお待ちしております。

E-mail senshu-maruoka@inter7.jp